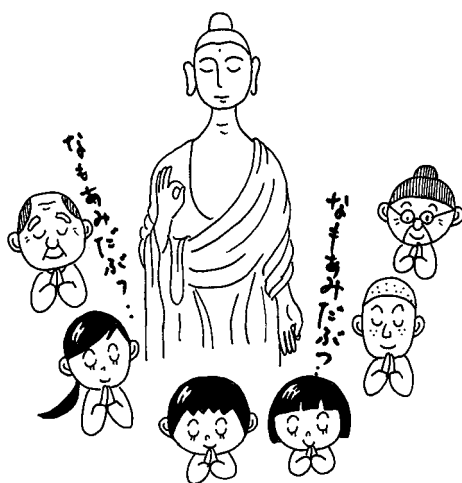


なぜ？なぜ？先生

～みんなの不思議～



「仏の子」

ってだれのこと？

讃歌「みていてね」の中に「(ぼくもわたしも) ほとけの子」という言葉が出てきます。歌詞の中では、「仏の子」の具体的なすがたが、一番では「よるひるいつでも ののさまを おててあわせて おがみます」、二番では「どこにいても ののさまの おなまえとなえて おがみます」と、行動面で示されています。

この歌詞の内容から、「仏の子」とは、「ののさま(阿弥陀さま)に手をあわせ、おなまえ(南無阿弥陀仏)をとなえておがむ子」のことであることが明らかに知られます。

親鸞さまは、その著述の中で、「仏さまを正しく念ずることができるものは仏の子だ」と言われます。そうすると、子どもたちが今こうして「南無阿弥陀仏」と念仏することができているのは、まさに子どもたちが仏の子であることの何よりの証だと言えます。

また、親鸞さまは、私たちが「南無阿弥陀仏を称えること」を「大行」と表現されます。ただし、私が仏になることを求めて念仏することを「大行」とは言われません。「大行」の「大」とは、仏さまが私たちに向かってはたらかれる大いなる慈悲のことです。したがって、実は念仏というのは、本来私が仏さまを念じることではなく、根源的に仏さまから私が念じられていることなのです。そうすると、私たちは自らが何かをすることによって仏の子になるのではなく、仏さまによって念じられているが故に、仏の子になるのだと言えます。

そこで、保育の現場に目を向けると、子どもたちは園内や本堂での仏参の中で「南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏」と、念仏を称えています。この「念仏を称えるということ」は、まさに「南無阿弥陀仏の功德をその通りに念じること」ですから、「阿弥陀さまに手を合せ、南無阿弥陀仏と口にし、拜んでいる」子どもたちは、間違いなく「仏の子」だと言えます。

さらに、「仏の子」とは、いま「ののさま(阿弥陀さま)に手をあわせ、おなまえ(南無阿弥陀仏)をとなえておがんでいる」子どもたちと先生…、誰でもない、そう、あなたのことだとも言えます。